



羽咋市

令和7年度後期

教育委員会だより

HAKUI CITY BOARD OF EDUCATION

令和7年10月から令和8年3月までの本市の学校教育に関する取組について主なものを取りまとめました。



休日の部活動「地域」へ

来年度から

保護者アンケート、86%賛成

羽中市教委は2026年度から、休日の中学部活動を「地域クラブ」で実施する方針を固めた。市教委が保護者を対象に行ったアンケート調査で、全体の86%が賛成した。教員の負担を軽減するとともに、少子化で学校単位の活動が困難になる状況避ける狙い。将来的には、平日の活動も地域クラブへの展開を検討する。

地域クラブは、教員ではなく地域の指導者が指導する。国は2031年度までに、休日の部活動を全て地域クラブに展開する方針を示している。生徒の参加は任意のため、部活動のみや地域クラブのみといった活動が可能で、ほかの地域や市外からも参加できる。

羽昨市内では現在、羽昨中で運動部8、文化部3、畠知中で運動部5、文化部1が活動している。ただ、羽昨中では今年度に水泳部、24年度に柔道部、畠知中では19年度に野球部が廃部となった。少子化などで今後部活動が減る可能性があり、市教委が地域展開を検討してきた。

市教委が8月下旬、市内の小学5年～中学2年の保護者303人に行ったアンケートでは、休日の部活動の地域展開に関し、全体の86%が「賛成」と答えた。これは「どちらかといえば賛成」と答えたことから、地域展開を本格的に導入することになった。

「充実した練習ができる」

羽昨中の男子バレー部は今年度、一部の活動を地域クラブで行っている。経験者の指導を受け、生徒からは「充実した練習ができていく」との声が聞かれた。

部員は現在、1週間のうち火曜と、土、日曜のいずれかの計2日間を地域クラブ「はくいVC男子(U-15)」で活動している。ほとんどの部員がクラブにも参加しており、7日は午後6時半から、OBの橋増文

一部展開の羽昨中・男子バレー部

さん(34)ら3人の指導で練習した。部活動では競技経験のない教員が顧問に就くケースがあり、指導が難しかったり、教員の負担が増したりする。橋さんは「生徒の選抜を残すためにも、地域で支えていきたい」と語った。バレー部主将の本吉慎之介さん(2年)は「専門的な指導を受けることで、部員の意識が向上した。チームとして、さらに成長したい」と話した。

地域クラブで活動する羽昨中男子バレー部
—羽昨市民体育館



休日の部活動がなくなった場合を想定した設問では、保護者の41%が「(地域クラブに)参加させたい」、48%が「子どもに任せる」と回答。中学1、2年の生徒214人への調査では「参加したい」が52%、「参加したくない」が31%だった。

羽昨市では、羽昨中バレー部など一部の部活動で地域展開を進めている。来年度4月時点で地域の受け皿がない場合は、最長8月末まで休日も部活動として続け、その間に地域展開の段取りを進める。

10月30日 (木)

羽咋、西北台小児童 合同で学ぶ

統合へ両校区の歴史、自然に触れ



妙成寺について学ぶ児童—羽咋市滝谷町

来年度統合する羽咋市羽咋小と西北台小の児童が、両校区の歴史や自然の学びを深めている。29日は西北台小校区にある日蓮宗本山妙成寺で4年生約70人が合同授業を行い、ふるさとの文化財に理解を深めた。

児童は市歴史民俗資料館の中野知幸学芸員の解説で五重塔や本堂、書院庭園などを見て回り、10棟の国重要文化財があることを学んだ。西北台小にとってはな

じみが深い妙成寺だが、羽咋小では初めて訪れた児童が多く、橋場愛琉さんは「写真で見る五重塔よりもきれいだっただ」と話した。

28日には、羽咋小で5年生約70人が対象の千里浜海岸について学ぶ教室が開かれ、西北台小も参加。県と市の職員が講師を務め、人エリーフや養浜などで砂浜の浸食対策を行っていることなどを紹介した。

11月7日 (金)

上空のドローンに手を振る児童 ＝羽咋市西北台小



「西北台」70人で人文字

羽咋、小学校閉校控え撮影

今年度末で閉校する羽咋市西北台小で4日、記念誌などに載せる写真の撮影が行われ、青空の下、児童と教職員約70人が「西北台」などの人文字を作った。

同校グラウンドに児童らが座って手をつなぎ、ドローンで撮影した。西北台小は一ノ宮、上甘田小が統合し、1989(平成元)年に創立した。児童数の減少などで、来年度に羽咋小と統合される。

羽咋小内に「ボラセン」

きょう開設 地域と学校 連携強化

羽咋市羽咋小は7日、校内にボランティアセンター



ベルマークの仕分けに協力する保護者―羽咋市羽咋小

を開設する。学校の取り組みに協力する保護者や住民らの活動拠点となり、地域で子どもを育てる学校づくりをさらに進める。

羽咋小では、登下校の見守りや本の読み聞かせ、クラブ活動などでボランティアが支えている。現在、教職員が保護者や住民に声を掛けて協力してもらっており、今後は参加したい人を

事前に登録することで、協力体制を充実させる。

学校と地域の連携を強化する「羽咋版コミュニティ・スクール」の一環で、センターは旧ランチルームに設け、活動や打ち合わせ、交流の場として活用する。

昨年度からは児童が集めたベルマークの仕分け、集計を保護者のボランティアが担っている。

今年度末で閉校する羽咋市西北台小は18日、全校児童48人による「たすきリレー」を行う。かつて同校はマラソン大会とは別に、県内の小学校では珍しい駅伝大会を行っていた。コロナ下で中止していたが、ラストイヤーに復活。長年、子どもたちの成長を見守ってきた地域で、西北台小として最後の児童が元気にたすきをつなぐ。

羽咋小と統合控え

11、12日、西北台小は全校児童がたすきリレーの練習を行った。バトンと違って、たすきのかけ方や渡し方にはコツが必要で、児童は教え合いながら走る順番などを確認。本番では地域の道路を走るが、この日はグラウンドを使った。

たすきリレーは児童が4チームに分かれ、駅伝形式でたすきをつなぐ。それぞれ400m、600m、800m、1kmを走り、計7・2kmになるようにする。誰がどれだけ、どの順番で走るかは各チームで決めるため、どう作戦を立てるかが大切になる。

西北台小は一ノ宮、上田小が統合し、1989（平成元）年に創立した。児童数の減少などで、来年度に羽咋小と統合する。西北台小では、2008年から

駅伝大会 6年ぶり復活 西北台小 最後のたすき



たすきをかけて練習する児童—羽咋市西北台小

18日、ふるさと駆ける

19年まで駅伝大会を行っていた。コロナ下以降は取りやめていたが、今年5月に羽咋小と合同でマラソン大会を行ったため、秋にふるさとを走るたすきリレーを開催することにした。千代悠雅さん（6年）は「最後まで諦めず頑張りたい」、磯見花奈さん（6年）は「笑顔で元気にふるさとを走るたすきリレーを楽しみたい」と話した。

赤羽萬次郎賞 喜び報告

羽咋から児童生徒7人受賞



岸市長に赤羽萬次郎賞の受賞を報告した児童、生徒と
田中校長 一羽咋市役所

市教委 「教育に新聞活用、成果」

北國新聞社と赤羽萬次郎顕彰会が主催する「赤羽萬次郎賞」で入賞した羽咋市内の小中学生ら8人が1日、市役所に岸博一市長を訪ね、受賞の喜びを報告した。市内の小中学校は本紙投書欄「地鳴り」への投稿を積極的に「新聞感想」部門では6人が受賞した。市教委は今後も新聞を活用し、ふんばりと愛の醸成や文章力向上につながる教育を進めていく考えを示した。

積極的に本紙「地鳴り」投稿

「新聞感想」部門で最優秀賞の北侑真さん（羽咋小4年）、優秀賞の中村颯世さん（粟ノ保小6年）、八（邑知小5年）、森田蒼空

さん（羽咋小6年）、優秀賞の粟ノ保小の田中利弘校長、「地域活動」部門の岡田吟弥さん（羽咋中2年）が訪れた。

作品では、大の里の横綱昇進や羽咋特産のスイカ、来年6月ごろに控えるトキの放鳥などを取り上げた記事を読んだ感想や自分の考えを記した。この日は児童生徒がそれぞれ、文章に込めた思いや受賞の喜びを発表した。

羽咋駅前などに設置されている「ゴゴゴ」や「ジャンーン」といった擬音彫刻に関する記事を取り上げた木村さんは「いろんな人の思いが込められていると知った。若い人がSNSなどで発信し、もっと羽咋が活性化してほしい」と紹介した。

岸市長は、自分の気持ちや文章にするのは大人でも難しいとした上で、「賞を

励みにして、さらに文章力や表現力の向上へ頑張ってもらいたい」とたたえた。

同席した八島和彦教育長は「『地鳴り』への投稿などに積極的に取り組んだ結果が出た。これからも新聞を活用した教育を進めていきたい」と話した。

賞は北國新聞の創刊者である赤羽萬次郎の生誕150年を記念して2010年に創設し、今年度は「新聞読んで感想文コンクール」と「北國あすなろ賞」を統合して3部門を設けた。

12月2日（火）

小中学生が北國新聞の投稿欄「地鳴り」へ盛んに応募している羽咋市で、投稿の輪が広がっている。今年度は教員が投稿を始めたほか、家族5人がそれぞれ掲載されたり、外国語指導助手(ALT)が児童との触れ合いをつつたりした。さまざまな人の思いが掲載されており、「地鳴り」が地域や家族の絆を強くする一役を担っている。

羽咋

羽咋市新保町の坂野雅允さん(45)の一家は昨年7、11月、家族5人の投稿が「地鳴り」に掲載された。7月に載った雅允さんの投稿が最初で、8月に妻の樹璃さん(43)、9月に次女の幸来さん(9)と粟ノ保小3年、10月に長男の一粟さん(12)と同6年、11月に長女の亜依さん(17)と七尾東雲高2年が続いた。雅允さんは粟ノ保小のPTA会長を務めており、その思いをしたためた。公民館主事の樹璃さんは広報に掲載する児童の川柳から感じた地域とのつながりを、小学生の2人は学校や家族

広がる地鳴りの「輪」

坂野さん 家族5人で投稿



「地鳴り」欄を見る坂野さん一家―羽咋市内

児童と触れ合うキンサーさん―羽咋市粟ノ保小

旅行の思い出をつづった。亜依さんは家族4人が掲載されたことを知り、スマートフォンから学校祭の思い出を投稿。一緒に出した友人もおり、亜依さんはスマホでも書くことができ便利。文章を書くのが好きなので、また投稿したい」と笑顔を見せた。

地鳴りに掲載されたことで、地域から声を掛けられたこともあり、雅允さんは「家族や地域の結び付きを改めて感じる機会になった」と話した。

「学校の一員に」

ALTのキンサーさん

米国出身で、粟ノ保小なつながつているとし、「子どもたちとどのように書く」ので英語を教えているALTのキンサー・サムさんは、学校の「一員になった」(24)「射水市在住」は、子どもたちが盛んに投稿していることを知って挑戦。子どもたちとの触れ合いなどについて取り上げた。キンサーさんは富大に留学経験があり、神道を学んだ。投稿は日本語学習にも

1月5日(月)

妙成寺の絵本読み聞かせ

羽咋・邑知中3人、園児に

日蓮宗本山妙成寺（羽咋市）を基にした絵本「どっから来たの大仏さん」を制作した邑知中の1年生3人は7日、邑知保育園で絵本の読み聞かせを行い、園児に妙成寺の歴史や特徴を分かりやすく伝えた。

絵本は、江戸時代に海岸に流れ着いた仏像の頭を住民が見つけ、胴体を造って

釈迦堂に安置したとする伝承を基にした筋書き。幼い子にも伝えようと大島絵本館（射水市）などの協力を得て、かわいらしい絵をふんだんに使って制作した。

卒園生でもある松岡蘭さん、福田龍生さん、安田琉希さんが保育園を訪れ、年長児16人に登場人物のやりとりなどを優しい語り口で読み上げた。手遊びで楽しんだり、他の絵本も読んだりした。

邑知中の生徒は邑

知小でも絵本の読み聞かせを行っており、松岡さんは「絵本を通して、妙成寺に行ってみたいと思う子がいると嬉しい」と話した。



妙成寺の絵本の読み聞かせを行う生徒
―羽咋市邑知保育園

©北國新聞社

2小の思い、AIまとめ

新年度に統合する羽咋市の羽咋小と西北台小が、新しい学校で大切にしたいことをテーマにした歌を作り、27日に初めて児童に披露された。児童が考えた「元気」「協力」「助け合い」などのキーワードを基に、



歌の歌詞を紹介する児童

|| 羽咋市羽咋小

羽咋 統合校の歌 児童が考案

生成人工知能（AI）が曲調の異なる3曲を仕上げた。今後、児童の投票で1曲に絞る。

統合に向けて、学校の一体感を醸成しようと企画された。昨年12月から、羽咋小では学年ごとに大切にしたいキーワード、西北台小では残したい校歌の歌詞などを考えてきた。集まった言葉を使い、生成AIがメロディーや曲調などが異なる3曲を作った。

27日は羽咋小に両校の1〜5年生約320人が集まり、羽咋小の各学年の代表がキーワードに込めた思いを発表。西北台小代表の児童は校歌の「胸に希望がわき上がる」の歌詞などを選んだ気持ちを紹介した。

選ばれた歌は、新しい学校で歌うなどして親しむ。岩田莉世さん（羽咋小5年）は「どれも明るい曲で、歌うのが楽しみ。新しい学校でもみんなと協力したい」と話した。

1月29日（木）

羽咋・粟ノ保小6年生

北國新聞の投書欄「地鳴り」へ積極的に投稿している羽咋市粟ノ保小で、これまでに6年生18人全員の作文が掲載された。日々の生活や住民との触れ合いで感じたことをつづり、地域に学校の取り組みを知ってもらう機会にもなっており、学校側は後輩に引き継がれることを望んでいる。

粟ノ保小は文章力向上の一環として地鳴り投稿に力を入

「地鳴り」本紙投書欄 全員載ったよ



地鳴りに掲載された6年生
——羽咋市粟ノ保小

れている。現在の6年生による作文の掲載は4年生の2学期に始まり、今年2月28日付で全員が載った。今年度は教諭も投稿しており、謝礼の図書カードを活用して児童に本を贈った。

6年生は18日に卒業式に臨む。松永直さんは「自分の文章が載るのは自信になった」、杉村蒼泉さんは「見た人から声を掛けられてうれしかった」と話した。粟ノ保小では今後も地鳴りへの投稿を続ける。